

大学図書館職員の育成・確保に向けた新たな取り組み

有川, 節夫
九州大学 : 総長

渡邊, 由紀子
九州大学附属図書館 : 図書館専門員 | 九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻 : 専任講師

<https://hdl.handle.net/2324/26653>

出版情報 : 図書館雑誌. 105 (11), pp.738-740, 2011-11-20. Japan Library Association
バージョン :
権利関係 :



大学図書館職員の育成・確保に向けた新たな取り組み

有川節夫・渡邊由紀子

1. はじめに

本稿では、筆者の一人が科学技術・学術審議会学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会の主査としてまとめた、「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－」（平成22年12月）¹⁾の二つ目の柱である大学図書館職員の育成・確保について概説し、九州大学が開設した大学院ライブラリーサイエンス専攻にも言及しながら、大学図書館職員養成の新たな仕組みについて述べる。

2. 大学図書館職員の育成・確保の必要性

2. 1. 大学図書館職員の業務内容の変化

社会全体の電子化の進展と学術情報流通の変化および大学を巡る財政面、制度面を含む環境の変化といった大学図書館を巡る状況の変化に適切に対応するためには、図書館職員に求められる新たな知識と見識に関して検討が必要である。

従来、大学図書館の伝統的な業務には、①資料収集・提供関連業務（資料の収集・組織化・蓄積・提供）、②利用者サービス業務（貸出、レファレンス、相互貸借、情報リテラシー教育）、③その他業務（ホームページの管理業務、館内の整備、図書館システムの管理）などがあった。一方、状況の変化に対応した新しい業務には、①カリキュラムと直結した資料整備、②情報リテラシー教育への直接的関与、③研究に直結するレファレンス、④大学の研究成果の集積と発信、⑤学生・教員間（研究者間）の学問的交流の場を大学図書館として提供するラーニング・コモンズの運用などがある。

大学図書館が重要な学術情報基盤としての機能

を効果的に発揮していくために、今後、大学図書館職員は、伝統的な業務の充実を図るだけでなく、学術情報を駆使して学習・教育・研究により積極的に関与し、専門家としてその必要性を学内にアピールし、大学内のさまざまな情報管理業務に関与していくべきである。

2. 2. 大学図書館職員に求められる資質・能力等

大学図書館職員に求められる資質・能力として、以下の四つの専門性が挙げられる。

1) 大学図書館職員としての専門性。図書館に関する専門性に加え、教育研究支援を円滑に行い得る学生や教員との接点としての機能を含め、大学全体のマネジメントに関係する能力なども求められる。特に最近の状況変化に適切に対応するため、学術情報流通の仕組みに詳しく、学術情報基盤の構築ができる人材の確保が重要である。

2) 学習支援における専門性。各大学等において行われる教育研究の専門分野（サブジェクト）に関する知識も求められており、教育研究と密接に関わる業務を行う者は、従来の事務職員とは区別して位置付けることが必要である。

3) 教育への関与における専門性。大学図書館職員が、情報リテラシー教育に直接関わることは新しい方向性であり、教員との協力の下に適切なプログラムの開発を行うことが課題である。また、教員や学生とコミュニケーションを図りながら、教育課程の企画・実施に関わることも必要である。

4) 研究支援における専門性。単に電子ジャーナルを提供するだけでなく、研究者が文献に容易にアクセスできるよう、必要な情報資源を関連付けたナビゲーション機能およびディスカバリー機能を強化することが必要である。また、機関リポ

ジトリの構築や新たなサービスの開発など、従来の専門性をさらに発展させることが期待される。

2. 3. 大学図書館職員の育成・確保の在り方

大学における養成には、主に、大学院、学部、司書資格取得レベルの各教育がある。中でも、特定の主題分野に沿ってレファレンスサービス等を行うライブラリアンは、図書館情報学以外の学問を修めた上で大学院に進学し、主題知識を活かして図書館情報学を学ぶことが望ましい。大学図書館に求められる機能・役割を勘案すると、公共図書館に求められるものと異なっているのは明らかであり、もはや大学図書館職員のスキルを司書資格によって説明することは困難である。そのため、新しい資格の確立を含めた広い意味での大学図書館職員養成の仕組みを模索する必要がある。

他方、大学図書館の現場における育成には、学内や複数の大学による研修の実施、在職しながらの大学院等での勉学や各種研修会への参加の奨励、海外研修の実施などが考えられる。しかし、大学の規模等の事情もあるため個々の大学で育成することは困難な面もある。また、各大学において、特定分野の専門性のみを有する職員を配置していくことも難しい実態にあることから、大学間における人材交流など、連携が重要である。

なお、大学図書館においては、人材の研修や育成とともに、優秀な専任職員を確保する観点からも、そのキャリアパスの形成について検討していく必要がある。検討にあたっては、大学図書館に要求される機能を担う人材の育成・活用のために、大学図書館職員については、事務系職員とは異なった枠組みを考える必要がある。また、図書館職員が特定分野の学位を取得して教員になったり、教員が図書館職員になったりするなどのパスも検討する必要がある。

3. 九州大学における職員養成の新たな取り組み

大学院レベルの養成課程として、九州大学が新設したライブラリーサイエンス専攻の取り組みと、専攻の教育研究と連携した附属図書館の諸活動を紹介することにより、大学図書館職員の育成・確保の一つの在り方を示したい。

3. 1. 大学院ライブラリーサイエンス専攻の開設

九州大学は、先端的で複合的な課題の側から科学のあり方を見直し、複数の学問分野を統合して課題を解決するための新たな知を創造する大学院「統合新領域学府」の第3番目の専攻として、2011年4月にライブラリーサイエンス専攻（修士課程）を設置した。同専攻は、「知の創造・継承活動」を支える「場」としての「ライブラリー」を科学し、ユーザーにとって真に意義ある情報の管理・提供を実現する高度な専門人材の養成を目指している。その目的を果たすため、①ユーザーのニーズと知の創造・継承プロセスを把握するための理論や技能に関する教育、②図書館情報学と記録管理学を統合した一体教育、③情報の管理・提供を実現するための、データエンジニアリングを含む情報通信技術の教育、④電子媒体の情報も対象とした、情報法制とその哲学ならびに流通制度に関する教育、⑤これからの情報の管理・提供のあり方や「ライブラリー」の新たな機能を探究させる教育、を行うものである。

上記の教育を行うには、関連する複数の学問分野を統合し、従来の「図書館学」とは異なる発想で新たな学問領域としての「ライブラリーサイエンス」を創設し、進化・発展させることが必要となる。同専攻では、アーキビスト、レコードマネージャー等の記録管理の専門家、サブジェクトライブラリアン等の情報専門職、データエンジニア等の情報通信技術専門家、情報管理・提供組織の管理者、「ライブラリーサイエンス」の研究者など、文系と理系の枠を超えて社会の変化に対応できる人材の養成を目指している。

専攻の詳細については別稿²⁾に譲り、次に大学院構想が生まれた経緯を振り返ってみる。

3. 2. 大学院ライブラリーサイエンス構想の背景

有川は、2008年まで約10年にわたって附属図書館長を務め、その間、機会あるごとに学内外に向けて自分の考えを表明しながら、当時九州大学附属図書館が抱えていた問題、そして他大学にも共通していた課題を列挙し、それらを組織的に解決してきた³⁾。折から大学改革の流れがあり、2004年度には国立大学が法人化される中、「図書館が変われば大学は変わる」という標語を考え、第50回国立大学図書館協議会総会の講演タイトルとした⁴⁾。大学が改革を迫られるということは、「今

の大学はだめだ」と言われているわけであり、図書館は大学の中核であるというのであれば、その大学図書館が率先して変わらなければならないという問題意識であった。

館長在任中は、海外出張の際には必ず大学図書館を訪問するようにした。諸外国の大学図書館では、博士号を持った図書館職員が珍しくなく、サブジェクトライブラリアンがそれぞれの専門分野をカバーして、学生用のみならず研究用図書の見つけやレファレンス等を担当していた。また、さまざまな分野で教員との共同プロジェクトを行っており、図書館職員に求められる専門性は非常に高いものであった。さらに、ライブラリアンは、学部・大学院におけるファカルティと同格であった。

我が国ではどうであろうか。大学図書館は、大学図書館基準により図書館としての使命が定められており、図書館職員には高度な専門家が必要であり、大学院において図書館情報学等を修めることが望ましいとされている。しかし、国内における大学院レベルの図書館職員養成大学の数に限られている。学部レベルの司書養成課程を持つ大学は多いが、多様な分野の研究者や学部学生・大学院生を抱える大学図書館では、公共図書館と比べ、当該大学の教育研究と密接不可分な関係が求められる。それに応えるためには、より高度な専門性を持った図書館職員を育てる組織が必要であると確信するに至った。

大学院ライブラリーサイエンスの構想は、以上のような、大学における図書館の役割、日本の大学と諸外国の大学における図書館の違い等について考察する過程で生まれたものである。

3. 3. 附属図書館と大学院の連携

九州大学では、附属図書館がライブラリーサイエンス専攻と密接に連携し、大学図書館職員の育成・確保に向けた新たな取り組みを始めている。

九州大学附属図書館は、開学以来百年にわたって蓄積した知的資産を有するとともに、ICTを活用した高度なサービス機能や電子リソースの整備、学びの場の提供等においても全国をリードしてきた。ライブラリーサイエンス専攻は、図書館の施設・資料を利用した演習、図書館の現場の課題をテーマにしたProject Team Learning、インターンシップ等を実施し、図書館を教育研究のフィールドとして活用している。

大学図書館の現職職員の育成という面では、勤務を続けながら大学院で平日昼間の修学が可能となるよう、就業規則の改正（1月単位の変形労働時間制の適用）を行った。現在、その制度を利用して、図書館職員2名がライブラリーサイエンス専攻の1期生として在学中である。さらに、九州大学以外の図書館職員が休職せずに同専攻に入学できるよう、大学間の人事交流を利用した受入制度についても準備中である。

また、図書館職員がライブラリーサイエンス専攻の授業に協力することで、学習支援および教育への関与における専門性の育成を図っている。とりわけ、現職の図書館専門員が、他の教員と同様に設置審査を経た上で、専任講師として専攻の教育研究活動に参画していることは、国立大学初の新たな試みである。今後、九州大学では、図書館職員の専門職制度を整備し、独自のキャリアパス構築に向けさらに検討を進めていく予定である。

4. おわりに

今回の「審議のまとめ」は、かなり踏み込んだ内容となっている。大学図書館に求められる機能・役割として掲げた、①学習支援および教育活動への直接の関与、②研究活動に即した支援と知の生産への貢献、③コレクション構築と適切なナビゲーション、④他機関・地域等との連携並びに国際対応といったことを実現するために、各大学が戦略的に図書館職員の育成・確保に取り組むことが期待される。

参考文献

- 1) 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会. “大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－”. 文部科学省. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm
 - 2) 渡邊由紀子, 富浦洋一, 吉田素文, 岡崎敦. 九州大学大学院「ライブラリーサイエンス専攻」の構想と意義. 情報管理. 2011, vol.54, no.2, p.53-62.
 - 3) 有川節夫. 国立大学図書館の課題と解決の試み. 大学図書館研究. 2004, no.70, p.1-8.
 - 4) 有川節夫. 図書館が変われば大学は変わる. 国立大学図書館協議会ニュース. 2003, no.70, p.16-26.
- (ありかわ せつお: 九州大学総長,
わたなべ ゆきこ: 九州大学附属図書館図書館専門員,
大学院ライブラリーサイエンス専攻専任講師)
[NDC 9: 017.7 BSH: 1. 大学図書館 2. 図書館員]